

序

疾患の診断を行う際に病理組織学的診断はその要になるものである。特に、本邦の死因の第一位である悪性新生物，すなわち，がんの診断においては必須のものである。

この診断業務を行っている病理医はこれまでは裏方の存在であった。しかし，病理診断科という標榜科として国民医療を支える一部門として認識されようとしてきている。また，必修化された医師臨床研修制度のなかでは，CPCレポートが必修項目となり，診療を行う医師のすべてが病理医の指導のもとで医師と成長する時間をもつことになった。

これまで，基礎医学と臨床医学の架け橋として病理学が語られてきたが，これからは臨床医学を支える病理学としての発展が期待される。病理診断学の発展である。

病理診断学の方法論で最も重要なことは病変の観察である。その中心は，肉眼的観察，組織学的観察である。病変により，電子顕微鏡的観察や免疫学的検査，染色体/遺伝子検査による細胞の解析が加わる。病理診断医のトレーニングは，肉眼的観察と組織学的観察を繰り返すことである。肉眼的観察には，臓器そのものをみるだけでなく，さまざまな画像所見の把握も含まれる。病理診断学のことをよくわかっていない医学生等が，顕微鏡をみて診断するのが病理診断で組織さえみれば診断がつけられると思っていることがしばしば見受けられる。しかし，どのような病変がどのような方法で採取され標本になったかは非常に重要な情報である。病理組織学的検査の申し込みの際には，なぜ病理組織学的診断が必要になったのか，きちんと画像所見も含めて詳細な臨床情報を提供する臨床医が増えることを願って本書は作成された。

羊土社から本書の企画が持ち込まれたとき，正常組織と病理組織との比較がメインの企画であったが，上記の思いから肉眼所見が豊富に加わったものとなった。実際の医療現場では，担当医は肉眼的に見え

るものを病変として認識して，その組織学的診断な裏付けを病理診断医に求めているはずである．本書に掲載された写真は，画像診断を行う際や病理組織検査申込書を記載する際に大いに役立つはずである．

医療現場でのカンファランスでは，さまざまな専門家がそれぞれの専門とする方法論で疾患を解析し正しい診断にたどり着き治療方法を検討していく．本書では病理診断学の立場から正常と考えられる組織像を提示した．正常組織との比較で病変を認識してもらえるように配慮した．病理組織学的診断のための材料はわれわれの手元にあったが，今回重視した肉眼所見用のさまざまな画像は関連した担当部署よりの提供を受けた．この場をお借りして感謝したい．

2008年 1 月

執筆者を代表して 下 正宗